

漆塗り職人 — 佐藤則武 [前編]

「平成の大修理」で大規模な修復が進む、東照宮をはじめとする日光の社寺群。その代名詞ともいえる豪壮な漆塗りの修復はもちろん、かつての技法や漆の調査まで行う職人・佐藤則武に、この道に入るまでの経緯と修復作業について話を聞いた。



東照宮・本殿の透き堀の前で。修復されたばかりの漆塗りと金箔が、往時の絢爛豪華な趣を今に伝える。



国宝の日光東照宮陽明門

「後年まで残る仕事」にあこがれて

「異色の職人」と言えるだろう。東照宮をはじめ、一〇〇棟を超える日光の国宝・重文の数々。そのほぼ全ての修復工事で「漆塗り専門技術主任」の重責を担う佐藤則武には、特定の師匠がおらず、昔ながらの徒弟制度で技術を身につけた職人ではない。

「中学生のころ、旧正月でその時期だけ仕事で忙しくない親父が家にいて、一緒に外を眺めて黙りこくってる。この親父、何考えてんだろと思っただけですけど(笑)、後になって思うと自分の過去を振り返ってたんじゃあないかな、と。それで、自分自身『これをやった』と思えるような、どうせなら一〇〇年くらい形に残るような

な仕事をした、という思いが出てきたんです」

もともと美術が好きだったため、美術学校に進んで塗装の勉強をした。卒業後はいったん内装工事の会社に就職。しかし：

「結局、そのころの塗装の仕事はもう電動工具でやって、みんな機械なんですよ。そうじゃなくて手仕事の塗装の仕事をやりたかった」

「内装の仕事にしても、半年に一回は改装する。ずっと後々まで残る仕事があったのに、こんなはずじゃなかったよな、と思い直したんです」

そんな折、日光に数多ある寺社仏閣の修理を請け負う「公財」日光社寺文化財保存会が漆塗り職人を募集していることを知り、矢も盾もたまらず飛び込んだ。

「いざやってみたら、お寺や神社の修復だから当然手仕事だし、何十年も残る仕事でもあるし、これは自分の理想の職業だな、と」

東照宮 — 改築・修復の歴史

日光東照宮は、言わずと知れた江戸幕府の開祖・徳川家康を祀るため、その死後に創建された神社である。そしてその二〇年後、三代將軍・徳川家光が大がかりな改築を行って、現在のような荘厳できらびやかな外観となった(寛永の大造営)。その後も元禄年間や宝暦年間な



さとう・のりたけ ● 1949 (昭和24)年、山形県大蔵村生まれ。美術好きが高じ、専門学校で塗装を学んだあと内装工事の会社に入社。その後「後になって振り返れる仕事をしたい」一心で(公財)日光社寺文化財保存会に入り、ほぼ独学で漆塗りを習得した。現在は日光の社寺修復事業全体の施工管理や研究も手がける。

「**手作業で、後世まで残る仕事をしたい。漆塗りは、そんな自分にとってつけの職だった**」

日光東照宮の漆塗り修復を統率する

現在は平成十九(二〇〇七)年に始まった「平成の大修理」の一期工事が佳境に入り、漆塗りの責任者の佐藤も多忙な日々を送っている。日光の社寺一〇三棟の見えている部分の九割以上に漆が使われているのだから、ある意味当然だ。「修復の方針としては、『前回の状態に戻す』こ



陽明門を飾る唐獅子の彫刻



右/華やかな外観とは裏腹に、修復作業は漆塗りを何度も繰り返す地道な作業の連続になる。左/現在は彫刻になっているが、創建時点では絵画だったことが修復作業で判明した。

ど数十年おきに大規模解体・修復事業が実施され、風雨や直射日光による劣化を防いできた。徳川幕府終焉後は荒廃の危機にさらされたこともあったが、昭和二十五(一九五〇)年に始まった昭和の大修理で再び整備され、その保存事業が評価されて平成十一(一九九九)年には周辺の社寺ともども世界文化遺産に登録された。(公財)日光社寺文化財保存会は昭和の大修理を契機として昭和四十五(一九七〇)年に設立された、日光の社寺の保存修理事業を専門に行う法人である。

「私が入ったのは昭和四十七(一九七二)年。それまで塗装の勉強はしてたけど、漆塗りは初めてで…入ってすぐに感じたのは、乾燥のさせ方が一般の塗装と漆では丸つきり反対っていうことです。天気の良い日なんてのはまずダメで、ある程度湿度がないと乾かない。これは概念を一八〇度変えないといけないな、と」

「塗装技師として『塗り方』だけはわかってました。先輩たちは『眺め八間』といって、一五センチくらい離れてきれいに見なければいけないっていう考え方だったけど、私は塗装業上がりで細かい部分に気になるから、他の人がもういいって言っても納得いくまで塗ってました。先輩たちは『勝手にやらせとけ』って呆れてましたけどね(笑)」

先人たちの仕事から学ぶ

そもそも、木造の建物に漆塗りを施すのには装飾以外に二つの目的がある。一つは漆が表面を覆って水をはじくため、防虫・防虫効果があること。もう一つは接着剤としての役割で、割れた部分の修復や下地を整えて金箔をしっかりと定着させる際に効果を発揮する。建造から四〇〇年を経てなお壮麗な東照宮の外観は、数十年ごとの修復の度に各時代の職人が漆を塗り重ね、建物の強度を保持してきた証左でもある。

「展覧会で作品を見たり、テレビで紹介されたお寺なんかを見学に行ったりして、『あ、こういう風にやってるんだな』と。あと、漆がはがれた部分を注意して見ると、前の人が失敗してるのもよくわかる。自分らもよくありますが、塗ってる最中に雨が降ってきて、急に湿度が高くなって乾きが早くなるとか。昔の痕跡を参考にして下地の比率を変えたこともあります」

「乾かす時に一定の湿度が求められる漆塗りは、急激な天候の変化に大きな影響を受け、塗った漆が縮んだり表面がぼけてしまったりする。手本となる師匠を持たない佐藤は、貪欲な探究心はもとより、幾重にも塗り重ねられたかつての塗師の修復の履歴をも糧として、作業に最適な天候・湿度の見極め方を身につけたのだ。」

と。当初の状態に戻すのはいろんな時代考証や裏付けが大変だし、設計変更も必要なので」「この仕事始めて四二年になりますけど、まだまだわからないことだらけですよ」

漆塗りの確かな腕を持ちながら、修復工事全体を取り仕切り、また熱心な研究者としての側面もある——日本が誇る世界遺産・日光の社寺は、このユニークな職人によって守られている。